

法政大学

SDGs+（プラス）推進特設部会

Voluntary University Review

SDGs+レポート

2025
(Vol.5)



SDGs VUR発行に寄せて

SDGs（持続可能な開発目標）は、「誰ひとり取り残さない」という理念を基盤に、すべての人にとって生きやすい世界の実現を目指す国際目標です。法政大学におけるSDGsへの取組は、その内容のみならず、歩みの時間軸においても、2015年の国連サミットで採択されたSDGsと密接に連動してきました。

2018年に発表された「SDGsへの取り組みに関する総長ステートメント」は、本学の姿勢を示すうえで極めて重要な意味を持ちます。しかし本学のコミットメントはこの声明にとどまらず、法政大学憲章や長期ビジョン（HOSEI2030）の理念に基づき、多様なイニシアチブや活動に反映されています。特に、2014年に採択されたSGU事業は、持続可能な社会の実現を最終目標とする「法政大学の理念を体現する取組」として位置づけられました。また、2016年に発表された「ダイバーシティ宣言」による多様性・公平性・包摂性の推進も、2030年を見据えた長期ビジョンの重要な柱となっています。

法政大学が目指す社会の姿は、「共通善」を基盤に、人々がより生きやすく、より豊かに暮らすことのできる社会です。人権の尊重、多様性の受容、異なる価値観を取り入れた公正な社会の構築は、本学の基本理念である「自由を生き抜く実践知」の中核をなしています。

SDGsの達成に向けた取組は、大きな挑戦です。2030年が近づくなか、世界的にもその歩みは加速しており、2024年には「未来のための協定」が発表されました。これは、SDGsの達成をさらに推進し、具体的な協力と行動を促す枠組みとして位置づけられています。両者は相互に補完し合い、より良い未来の実現に向けて動き出しています。

法政大学も、多様な人々が共に生きやすい社会の実現を目指し、SDGsの達成に向けて、大学ならではの取組を一層推進してまいります。本報告書では、その具体的な歩みを振り返り、これまでの成果と今後の展望を共有いたします。

法政大学総長

Diana Khor



法政大学SDGs+（プラス）推進特設部会 と 法政大学SDGs+2030アジェンダ

法政大学SDGs+推進特設部会とは

法政大学は、1999年に環境憲章制定、ISO14001審査登録などを行って以来、地球環境との調和・共存と人間的豊かさの達成を目指し続けてきました。2016年には法政大学憲章「自由を生き抜く実践知」を制定し、より一層、地球社会の課題解決への貢献および持続可能な社会の未来に貢献することを謳っています。

2018年12月には、法政大学憲章の下、「SDGsへの取り組みについての総長ステイメント」を発表するとともに、全学的にSDGsを推進し、法政大学ならではの貢献をプラスするという意味を込めたプロジェクト「法政大学SDGs+（プラス）プロジェクト」を設置しました。さらに2023年4月からは、大学全体でSDGs推進により一層取り組むべき課題であるとの考えから、HOSEI2030推進本部の「SDGs+（プラス）推進特設部会」に移行し、「教育」「研究」「社会貢献」「学生」の4つを軸とし、様々なパートナーと連携しながら活動しています。

自由を生き抜く実践知

法政大学憲章

SDGsへの取り組みに関する
総長ステイメント

法政大学SDGs+推進特設部会

法政大学SDGs+2030アジェンダ

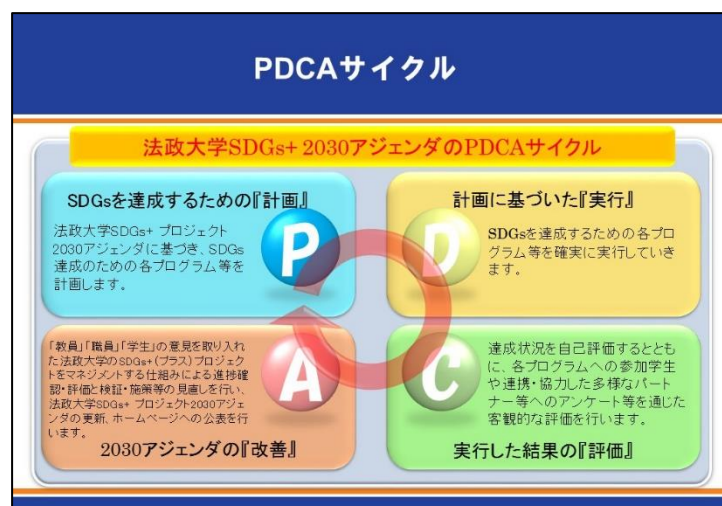
学生・教員・職員の意見を取り入れた
法政大学SDGs+ レビューミーティング

法政大学SDGs+2030アジェンダとは

本推進特設部会では、2020年からSDGsの「行動の10年（Decade of Action）」がスタートしたことを踏まえ、2030年までに達成すべき目標として、「法政大学SDGs+2030アジェンダ（以下アジェンダ）」を策定しています。アジェンダでは、「教育」「研究」「社会貢献」「学生」「パートナーシップ」のゴールを定め、それぞれに、ターゲット、インディケーター、目標値（2030年次）を設定しています。

また、アジェンダの進捗状況を確認し、行動計画の改訂を行うレビューミーティングを毎年実施しています。

このSDGs+レポートでは、ゴールごとの主な活動内容等を報告します。





ゴール1

SDGs人材育成のためのあらゆるプログラムを設置し、SDGs人材を世界中に輩出する。

ターゲット		インディケーター		目標値(2030年次)
1.1	すべての学生等がSDGsについて理解する。	1.1.1	オンライン講座「SDGs入門」の受講者数	累計1万人以上
		1.1.2	SDGsサティフィケート取得者数	累積2,000人以上
		1.1.3	SDGsに関する正課外教育プログラム等の受講者数	累積5,000人以上
1.2	すべての学生等が多様なフィールドでSDGsを実践する。	1.2.1	SDGsに関係したフィールドワークプログラムの実施数	累積100以上
		1.2.2	SDGsに関係したフィールドワークの参加人数	累積2,000人以上
1.3	すべての学部等においてSDGsに関連する科目を幅広く開講する。	1.3.1	SDGsに関連する科目数	2030年のSDGs科目群への提供科目数 1,000科目以上

SDGsサティフィケートプログラム

SDGsサティフィケートプログラムとは、本学が独自で制作したSDGs学習用オンデマンドコンテンツ「SDGsオンライン解説動画」を視聴し、全学部から提供されているSDGsに関連した科目で構成されている「SDGs科目群」の中から12単位以上を修得することで修了証(サティフィケート)が授与される制度です。2021年度秋学期より、デジタル証明書である「オープンバッジ」を活用して発行しています。

2024年度末時点での取得者数は126名となっており、依然として目標値の10%にも届いておらず、特に2024年度の伸び率が低く、取得者数の増加は急務の課題であります。今後はサティフィケートの周知強化だけではなく、取得する意義や活用方法、社会(企業や自治体等)からみたサティフィケートの魅力等を含めた広報戦略の検討や、他のSDGsと関連するサティフィケートプログラムとの有機的な連携等を含めた仕組みの見直しも含め、推進いたします。

STARTプログラム

STARTプログラムとは、SDGsで先進的な取組をしている企業等からゲストスピーカーを招き、講義やフィールドワーク、グループワーク、グループ発表を行うことを通して、SDGsを学び、実際のアクション(行動)に繋げるための思考を学ぶ正課外教育プログラムです。2023年度までは1年間にわたる長期のプログラムとしておりましたが、2024年度は、より受講の自由度が高くかつ受講生のニーズに沿った学習の実現を目指し、プログラムの「全必修型」から「フレックス型」への変革を行いました。フィールドワークを必須とする「コアワーク」と必ずしも必要としない「フレキシブルワーク」に分け、それぞれのカテゴリで複数の個別プログラムが集まるようなプラットフォーム型のプログラム構成とし、様々な企業や自治体にご協力をいただき、バリエーション豊かな12のプログラムを実施しました。本学のみならず連携する大学や高校等、多くの他大学の学生・高校生にも参加いただき、年代や学部・学科の異なる多様な方々が世代を超えてともに学びあいました。2022年度から続いた一般財団法人三菱みらい育成財団の助成は2024年度で終了し、2025年度からは自走化が求められます。様々な企業や自治体から講師を招き、各講師企業等の特徴を活かした本プログラムの評価は非常に高く、2025年度以降もこれまでの経験やノウハウを活かしながら、持続的なアップデートを目指してまいります。



プログラム実施の様子



北海道下川町でのフィールドワーク



STARTプログラム
報告記事

STARTプログラム受講学生の声

私がSTARTプログラムに参加した理由は、SDGsという言葉を知り、理解が浅いことに危機感を覚えたことと、自分が住む地域の課題と可能性を考えたいと思ったからです。様々な地域に足を運び対話することで、SDGsの軸となる考え方を得て視野を広げたいと考えました。

実際に陸前高田市でのフィールドワークでは、災害の恐ろしさと復興への想いを直接感じ、将来を担う私たちが「自分ごと」として繋ぐ責任を託されたと考えています。「一度やめてしまうと元の形を取り戻すことは難しい」という住民の方の言葉からは、時代の変化に合わせる必要性とただ

流されずどのような形で受け継ぐのか対話を重ねる大切さを学びました。

私はプログラムへの参加とオープンバッジの取得がきっかけとなり、地域のボランティア活動や「上級救命技能認定証」「セーフティリーダー認定証」といった資格の取得など身近な挑戦を始めました。このプログラムで得た知識や視点、学年・学部を越えた人との繋がりは社会に出た後もきっと力になるはずです。みなさんもぜひ参加してみませんか。



法政大学
経営学部 経営戦略学科
寺田 真悠子 さん



ゴール2

SDGs達成に貢献する研究を推進し、
社会に発信する。

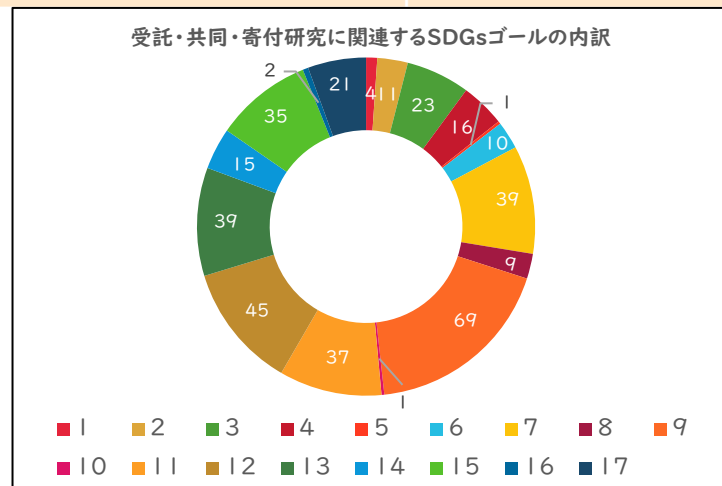
ターゲット		インディケーター		目標値(2030年次)
2.1	SDGs達成に貢献する研究やSDGsに関連する研究を活発に行い、発信する。	2.1.1	SDGs登録プロジェクト数	累積100以上
		2.1.2	SDGsに関連した受託・共同・寄付研究数	累積50以上
		2.1.3	ホームページや冊子等で発信するSDGsに関する研究数	累積1,000以上

SDGsに関連した受託・共同・寄付研究数

法政大学SDGs+2030アジェンダでは、SDGsに貢献する研究の促進および発信を活発化させるため、「SDGsに関連した受託・共同・寄付研究数」をインディケーターの一つとして設定しています。これは、本学内のSDGsに関連した研究の一部を把握・整理するとともに、そうした研究を社会に発信していくことを見据えて設定したものです。2024年度には、研究開発センターとの連携のもと、共同研究・受託研究・寄付研究などの申請書式に「貢献するSDGsのゴール」の記載欄を設け、当該インディケーターの把握に向けた運用を開始しました。これにより、学内のSDGsに貢献する研究の件数や分野を可視化する仕組みが整備され、今後のさらなる分析や発信の基盤が構築されつつあります。2025年度以降は、このような研究の継続的な把握とともに、学内外への情報発信を一層充実させてまいります。

「文理共創フォーラムー文理で拓くカーボンニュートラル推進・SDGs研究ー」の開催

法政大学では、SDGsの推進とともに、カーボンニュートラル社会の実現のため、様々な活動を推進しています。2025年3月には、本学市ヶ谷キャンパスにて、「文理共創フォーラムー文理で拓くカーボンニュートラル推進・SDGs研究ー」と題して、本学に所属する文理それぞれの教員が参加し、それぞれの理解を深めながら、文理共創の可能性を探るフォーラムを開催しました。各分野の教員からの研究内容に関する講演や文理の垣根を超えた参加者同士のトークセッションを行い、文理共創に関する議論を交わしました。



環境負荷の少ない新しいプラスチックの開発に向けて



生命科学部
杉山 賢次 教授

最近、海に流れ出したプラスチック製品が原因となる海洋プラスチックごみ（マイクロプラスチック）問題が耳目を集めています。この問題の根本的な原因は、ペットボトル等の合成高分子が木材等の天然高分子とは異なり、自然界に存在する微生物がもつ酵素では分解されないことにあります。ここで注目を集めているのが天然高分子と同じように自然界で分解される生分解性プラスチックです。その多くは脂肪族ポリエステルと呼ばれる高分子化合物ですが、耐熱性や耐久性に乏しく用途が限られているのが現状です。しかし、耐熱性の高い化学構造を組み込むと生分解性は失われてしまいます。

私の研究室ではこの問題を解決すべく、生分解性プラスチック本来の生分解性を保ちながら耐熱性を向上させる研究に取り組んでいます。図に示すように、生分解性プラスチックにクマリンと呼ばれる化学構造を組み込みます。ここに紫外線UVAを照射するとクマリン基の二量化反応が起こり、生分解性プラスチックを構成している複数の高分子が結合（架橋）し、生分解性は失われますが、耐熱性が向上します。つぎに、この架橋した高分子に紫外線UVCを照射すると、結合していた高分子がばらばらの状態に戻り（脱架橋）、生分解性を取り戻すことができます。このように、架橋させた状態で耐熱性を活かして製品として利用した後、脱架橋して元の生分解性プラスチックに戻すことができる新しいプラスチックの開発に成功しました。

表 研究テーマ・概要とSDGsとの関係

研究キーワード	研究関連の主なSDGs目標	
生分解性プラスチック 高分子化学 合成高分子 光反応	9 産業と技術革新の 基盤をつくろう	12 つくる責任 つかう責任

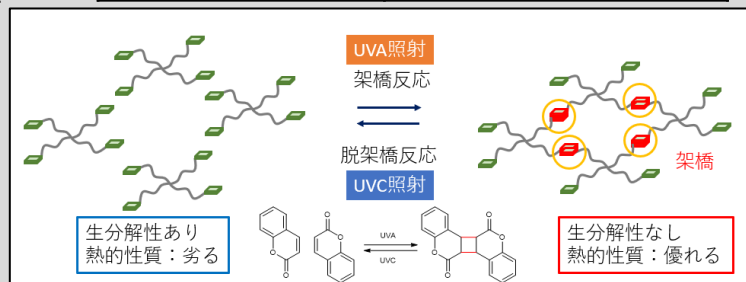


図 可逆的光反応を利用した生分解性プラスチックの耐熱性と生分解性制御



ゴール3

社会との接続を強化し、
誰一人取り残さない社会を構築する。

ターゲット		インディケーター		目標値(2030年次)
3.1	SDGsの「leave no one behind(誰一人取り残さない)」の理念に基づき、誰もが無償で受けられるプログラムを提供する。	3.1.1	SDGsに関連する講座、セミナー、シンポジウム等の開講数	累積100以上
3.2	SDGsを軸とした高校教育と大学教育の接続プログラムを実施する。	3.2.1	プログラム実施数	累積50以上
3.3	SDGsを軸とした連携事業を活発に実施する。	3.3.1	地方自治体との連携事業実施数	累積100以上
		3.3.2	企業等との連携事業実施数	累積200以上

SDGsを軸とした連携事業の概説

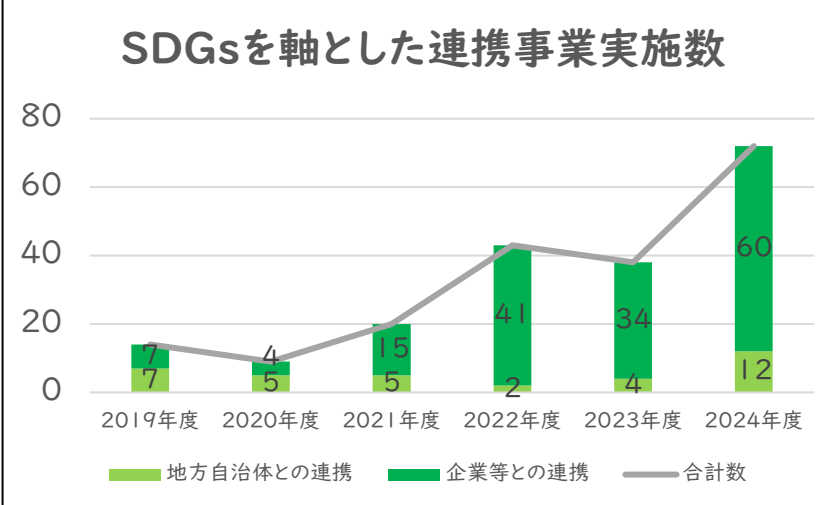
法政大学では、社会との接続を強化するため、様々な企業や地方自治体との連携事業を実施しています。企業等との連携事業実施数は2023年度より大きく伸ばし、2024年度は計60回の連携事業を実施することができました。今後も、実施数の維持・拡大に努め、目標値の達成を目指してまいります。

地方自治体との連携事業実施数についても、オンラインの活用や新たな自治体との連携を創出できたことにより、2024年度は前年度の3倍である計12回実施することができました。一方で、目標値には依然として達していない状況です。引き続き、オンラインとフィールドワークとを上手く活用しながら、実質的な連携の強化を図ってまいります。

SDGsを軸とした高大連携事業

法政大学では、SDGsを軸とした様々な高大連携プログラムを展開しています。たとえば、「教育×SDGs」で取り上げた「STARTプログラム」では、2024年度は6回の高大連携事業を実施し、付属校や高大連携事業に関する協定校から延べ22名が参加しました。大学生と高校生の世代を超えた学び合いにより双方が刺激を与えあうことで、新たな気づきや知見を得る場となりました。

また、「学生×SDGs」の一環であるSASHの活動として、法政大学中学高等学校にて、デザイン工学研究科の中野研究室(旧川久保研究室)が開発した「CN2050 ～脱炭素ボードゲーム～」を用いた「脱炭素アクション」に関する出前講座を実施しました。当日は、生徒会の中高生を対象に、まず気候変動の現状や環境問題に関する世界の動向について基礎的な講義を行った後、中高生がグループに分かれ「脱炭素ボードゲーム」を体験しました。各グループが、「どのようなアクションが脱炭素につながるのか」について話し合いながら熱心に取り組んでおり、研究室およびSASHの学生もレクチャー役として参加し、生徒の皆さんとの交流を深めました。



法政大学中学高等学校における
「脱炭素アクション」に関する出前講座の様子

クイズ正解は本当に3年後?! 赤坂の再開発で社会貢献

TBSは2024年1月、法政大学SDGsパートナーズに加盟し、産学連携のSTARTプログラムに参画しました。TBSでは2021年からSDGsイベント「地球を笑顔にする広場」を継続開催しており、SDGsの普及はマスメディアの責務と考えています。「SDGs疲れ」が懸念される中、高校生・大学生の意見を聞く本プログラムは、貴重な機会でした。

彼らに提示したテーマは「SDGsにあふれる街・赤坂をどう創

出するか」。2028年の再開発後の赤坂を体験する世代だからこそ、彼らの視点に期待しました。

初めは控えめだった彼らが回を重ねるごとに大胆に提案を行う様子に、放送局の会議とは異なる刺激を受けました。3年後にどのアイデアが実現するか、未来に向けた「タイムカプセル」を託した思いです。



株式会社TBSホールディングス
小林 豊 氏

学生×SDGs STUDENTS ENGAGEMENT for SDGs

ゴール4

学生があらゆる場所で活躍できる
フィールドを提供する。



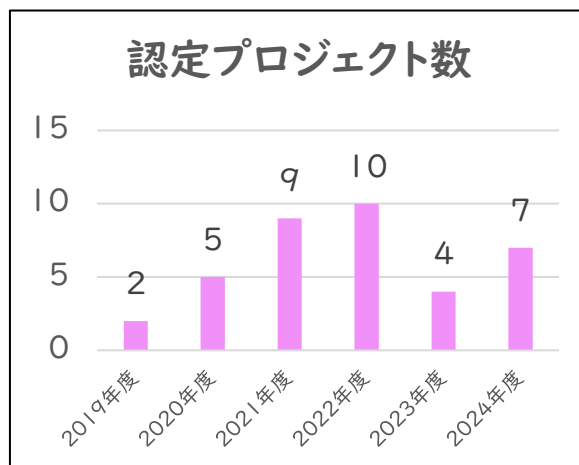
ターゲット		インディケーター		目標値(2030年次)
4.1	すべての学生がSDGs達成に貢献する取り組みを実施する。	4.1.1	SDGs Action Students of HOSEI(SASH)登録者数	累積500人以上
		4.1.2	認定プロジェクト数(SASHプロジェクト)	累積100以上
4.2	世界中の学生とSDGsをテーマにした交流を実施する。	4.2.1	海外学生との交流プログラムの参加人数	累積4,000人以上
		4.2.2	海外学生との交流プログラム実施回数	累積400回以上
4.3	学生がSDGs達成に貢献する活動やSDGsに関連する活動内容を発信する。	4.3.1	コンテストやポスター展示会などのプログラム実施回数	累積20以上

SDGsに貢献する活動を行う学生団体「SASH」

SASH(サッシュ/SDGs Action Students of HOSEI)は2019年に発足したSDGsへ貢献する活動を積極的に行う学生組織で、2024年度末までに123人の学生が登録しています。これまでに合計37回の認定プロジェクトを実施し、参加学生たちの興味関心に合わせたプロジェクトが活発に行われてきました。そのうちの1プロジェクトについて、本ページ下部にてご紹介していますので、ぜひご覧ください。また、2024年度は、新たな試みとして、関西大学で同じくSDGs貢献のために活動する「関西大学SDGsキャンパスサポーター」の学生たちと、夏休み期間に合同合宿を実施しました。合宿では、関西大学のSDGsパートナー企業協力のもと、SDGsに関する社会での様々な取り組みを学び、SDGsへの理解を深めるとともに、企業が提示した様々な課題に対して法政大学・関西大学の混合グループにてディスカッションを行い、最終日には課題解決に向けたプレゼンテーションを行いました。この合宿は、SDGs達成に向けた新たなアクション創出のきっかけになったとともに、他大学の同じ目標に向かって活動する学生との交流もできる貴重な機会となりました。



法政大学・関西大学の合同合宿の様子



KANDAI×HOSEI SDGsアクション
プランコンテストの様子



コンテスト詳細

KANDAI×HOSEI SDGsアクションプランコンテスト

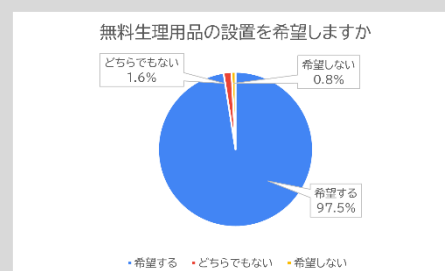
法政大学と関西大学は、SDGsを軸とした様々な連携事業を共同で実施しています。その一環として、2020年度より「KANDAI×HOSEI SDGsアクションプランコンテスト-持続可能な未来のために私たちができること-」を共催しています。本コンテストは、学生自らが大学での学びの中で持続可能な社会の姿について主体的に考え、SDGsの達成に向けての具体的な提案を行うものに対して顕彰し、学生によるSDGsのためのアクションの創出の促進を目的に実施しています。2024年度は、両大学合計18件のエントリーのうち、10チームが本審査へ出場し、多種多様なアクションプランが発表されました。また、EXPO2025大阪・関西万博の開催にともない、2024年度のコンテストでは、「大阪・関西万博賞」を設置し、見事受賞した本学の現代福祉学部佐野ゼミ・スポーツ健康学部吉田ゼミの合同チームが、実際の大阪・関西万博のパビリオン内ステージで、アクションプランのその後の活動報告を行いました。

SASHの活動 ～『学内での生理用品無償提供プロジェクト』～

SASH(サッシュ:SDGs Action Students of HOSEI)は、SDGsに関する取り組みを行っている大学公認の学生組織です。現在50名以上の学生がキャンパスや学年の垣根を越えて活動しています。そんなSASHで私が取り組んだのは、「学内への生理用品無償提供プロジェクト」です。

きっかけは、大学の授業で見た一本の映像でした。経済的な理由で生理用品が買えず、安心して学校に通えない学生の映像でした。5人に1人の学生が、同じような経験をしているという現実を前に、強い衝撃を受けました。「なぜ月経は生理現象であるにも関わらず必需品である生理用品が手に取れる環境が用意されていないのか」。そんな疑問が、私の中にずっと残りました。生理用品は、女性にとってトイレトペーパーと同じく生活に必要不可欠なものです。それなのに、学校のトイレに置かれていない、購入には税がかかる、持ち歩くことが“当たり前”とされる。これらの現状の背景には、生理が長年“女性の中だけの問題”として見えづらくされてきた歴史や、社会の無関心があると思います。だからこそ私は、自分が通う大学から変えたいと考えました。個人の想いを形にする場としてSASHに参加し、予算や設置環境の制約がある中企業と何度もやり取りを重ねて、まずは期間限定のトライアル設置を実現しました。プロジェクト後のアンケート

では、「安心して大学に通える」「急に必要になっても助かる」などの声が多く寄せられ、実際に学生の役に立てた実感とともに、社会を少し前に進められたという確かな手応えを得ることができました。SASHには「ワクワクする未来を創造する」というモットーがあります。私も最初は“誰かが変えてくれる”と思っていました。でも、動いたからこそ実現したこと大変嬉しく思っています。これからも、誰かの「困りごと」や「声にならない声」に寄り添いながら、社会の当たり前を問い直す活動を続けていきたいです。



法政大学
キャリアデザイン学部
キャリアデザイン学科
安齊 唯花 さん

パートナーシップ×SDGs PARTNERSHIP for SDGs

17 パートナーシップで
目標を達成しよう



ゴール5

あらゆる課題に対して、パートナーシップで
目標を達成する体制を構築する。

ターゲット		インディケーター		目標値(2030年次)
5.1	地方自治体や企業、大学など様々なパートナーとの協力体制を構築する。	5.1.1	地方自治体のパートナー数	10以上
		5.1.2	企業のパートナー数	60以上
		5.1.3	大学など教育機関のパートナー数	10以上
5.2	様々なパートナーとコミュニケーションを図り、新しい価値を創造する。	5.2.1	SDGsパートナーズ交流会等の開催数	累積10回以上

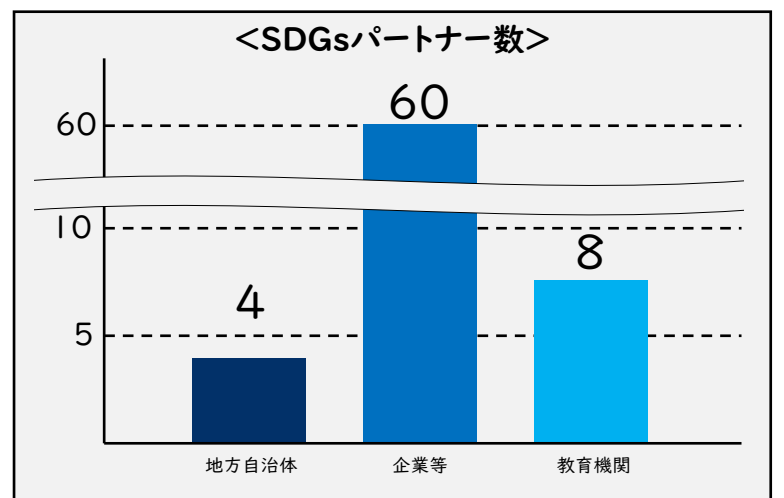
「法政大学SDGsパートナーズ」加盟団体との連携

SDGsパートナーズに加盟する地方自治体・企業・教育機関等の数については、2030年までの目標値を十分に達成できる状況となっています。特に企業パートナーについては、目標数である60に到達しました。2024年度も、STARTプログラムにおいては、多様な連携企業や自治体等を講師に招き、パートナーとの連携プログラムとして計10個のプログラムを実施するなど、実質的な連携を進めることができました。

2025年度以降は、企業パートナー数の現状維持に加え、地方自治体・教育機関のパートナー数拡大を目指し、実質的な連携を重視したパートナーシップの推進を図ってまいります。



連携プログラムの実施報告



法政大学SDGsパートナーズ交流会の開催

法政大学SDGsパートナーズでは、学生の活動発表の場の提供や、本学とパートナーとの連携事業の促進、さらには学生とパートナー、またパートナー同士の交流などを目的に、年に2回交流会を開催しています。2024年度は、タキヒヨー株式会社様やコマニー株式会社様といったSDGsパートナー企業や本学経営学部北田ゼミをファシリテーターとしてワークショップを実施したり、SDGsの達成に向けて日々研究・活動をしているゼミや学生団体によるポスターセッションを行ったりするなど、パートナー様同士はもちろんのこと、パートナー様と学生とが交流を深められる企画を多く実施しました。参加者からは、「大学生だけでなく、社会人の方と交流することで今まで見えなかった視点が見えてきてとても興味深かった。」「学生と社会人の価値観や考え、気づきなどのギャップが分かり、良い発見だった。」など、多くの感想が寄せられました。

2025年度以降も、プログラムの連携のみにとどまらず、このような交流の機会の創出も積極的に行い、パートナーシップとしての連携を強化してまいります。



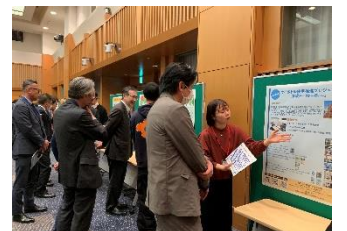
2024年度
第1回交流会



2024年度
第2回交流会



タキヒヨー株式会社様による
SDGsワークショップ



ポスターセッションの様子

法政大学SDGsパートナーの声

コマニーはパーティションを通じて空間に新たな価値を創造するメーカーです。SDGsの実現に向けて具体的な方針や施策に落とし込み、商品やサービスによって社会的インパクトを創出するとともに、私たちに関係するすべての人がより幸福で充実した生活を送ることができるよう、企業として取り組みを展開しています。

その取り組みの1つとして、2023年から法政大学SDGsパートナーズへ参加しています。2024年は7月から数回にわたって実施した学生向けのワークショップで、デザイン思考を用いた「学生にとっての価値ある空間」を議論しました。12月の法政大学

SDGsパートナーズ交流会では「月面基地に求められるサステナブルな空間とは？」という題材でファシリテーションを担当しました。

どちらのワークショップでも、Well-beingに過ごすためにはどんな配慮が必要なのか、そして人と環境のサステナブルな関係を考えることの重要性を改めて確認することができました。当日は多様な参加者の皆様から自由な発想を頂き、大変多くの学びを得ることができました。

貴重な機会をありがとうございました。



コマニー株式会社
五十嵐 翼 氏

SDGs+推進特設部会の取組みに対する第三者意見

株式会社東和エンジニアリング 教育ソリューション営業部 次長 中間 健次 氏



当社はICTを基盤に、教育・ビジネス・公共分野など幅広い領域でシステムインテグレーションサービスを提供しています。特に、ICTを活用したSDGsの取組みとして、多言語医療通訳サービス「Medi-Way」により外国人の医療アクセスを支援し、多文化共生の実現に貢献しています。災害時にはICTを活用して地域の安全確保に努めるほか、子ども向けのプログラミング教室やアート体験を通じて、質の高い教育の提供と持続可能な社会の実現を目指しています。

2021年度より『法政大学SDGsパートナーズ』に参加しており、学生や関連企業の皆様とSDGsについて意見交換できるこのパートナーズ制度に大きな魅力を感じています。学生の取組み・想いを直接聴くことで、SDGsに対する理解が深まるだけでなく、当社の事業にとっても新たな気づきやヒントを得る貴重な機会となっています。今後もこのパートナーズ制度を通じて、より良い社会づくりに貢献してまいります。引き続きよろしくお願いいたします。

中標津町役場 総務部政策推進課企画調整係 係長 伊與部 浩輝 氏



中標津町は、北海道の東部、世界自然遺産の基部に位置する人口約22,000人の町であり、根室地域のほぼ中央に位置する地理的条件や、札幌・東京と道東をつなぐ中標津空港の存在により交通の要所となっている町です。

法政大学様とは、2024年9月に「中標津町SDGsフィールドワーク2024」と題して、学生達が中標津町内でのフィールドワークを行い、地域資源や地域住民に触れ、SDGsの視点で当町の課題である「若者に選ばれる地域・活躍できる地域になるために必要なこと」を考え発表する取組を実施させていただきました。

この取組を通して法政大学様の学生達から都市部の若者目線での多くのヒントをいただいたところであり、当町のまちづくりの視点にも活かさせていただいています。

現在も法政大学様と新たな学生フィールドワークの連携を進めさせていただいており、今後も、学生達の「地域での学び」と「地域とのつながり」について連携を深めていきたいと考えています。

SDGs+レポート総括

一法政大学SDGs+レビューミーティングにおける教職員・学生との振り返りを経て一

国連が昨年6月に公表した「2024年持続可能な開発目標報告書（SDGsレポート2024）」によると、SDGsの17の目標のうち予定通りに進んでいるのはわずか17%であり、半数近くがごくわずか、あるいは緩慢な進捗にとどまっています。新型コロナウイルスの世界的流行や長引くロシア-ウクライナ戦争、パレスチナ情勢の混乱などによって、SDGsがスタートした2015年よりも事態が悪化している目標も少なくありません。森林火災など気候変動による災害もSDGs達成の足を引っ張っています。

今後、期限までに世界全体で達成できる目標は1つもないとの見込みもあり、国際社会では既に2030年後の世界を見据えた「Beyond SDGs（ビヨンドSDGs、SDGsその先へ）」についての話し合いが始まっています。大阪・関西万博でも「SDGs + Beyondいのち輝く未来社会」をテーマにSDGsの現状と未来について議論する場を多く設け、日本は世界に先駆けて「ビヨンドSDGs」を担う役割に名乗りをあげました。

2030年に創立150周年を迎える法政大学は、それまでに達成すべき目標を掲げて「法政大学SDGs+2030アジェンダ」を進めています。アジェンダでは、「教育」、「研究」、「社会貢献」、「学生」、「パートナーシップ」のゴールを定め、地域、企業、他のさまざまな機関と連携してSDGs達成に向けて取り組んでいます。この「法政大学SDGs+レポート」では、法政大学の教職員と学生、その他のパートナーズとのコラボレーションで持続的に進めてきた数多くのプロジェクトやイベントに加えて、今後の計画も紹介しています。本レポートを通じて法政大学のSDGs関連の活動への理解を深めて頂きたいと思っています。

本学の今後の活動の鍵として、数々のイベントの成果の可視化、学生のアイデアの実現を支援するための体制強化、また、学内外からの支援と連携などが挙げられます。大学理念との一貫性を高めて、2030年まで、そしてその先まで見据えた活動を展開し、全学一体となってSDGsの進捗を推し進めるために挑戦を続けていきます。



法学部
本多 美樹 教授
法政大学SDGs+推進特設部会座長

環境問題、難民・移民問題といった地球規模の問題への国際社会の取り組みを、国家のみならず、地域・国際機関、市民社会などの多様なアクター間の協働と確執という視点から考察している。とくにSDGsゴール16「平和と正義をすべての人に」に関心を寄せ、国家は国際秩序の安定のためにどう利害調整を行うのか、どの分野でどの程度他のアクターと協力できるのかについて研究を進めている。ポーランドのワルシャワ大学とはゼミ生や他学部教員も交えて学際的な交流を行っている。



Voluntary University Review
「SDGs+レポート2025 (Vol.5)」

発行：法政大学SDGs+推進特設部会
2025年9月19日 発行